

空



2017・6・7

**SORA** 73号

# 白髪

柴田 佐知子

川幅にまさる河原や鳥の恋

野遊びや動かぬ母に日がたつぷり

片方は母のための手青き踏む

巻き癖の端はねてゐる花筵

白髪の母をつつみし花吹雪

三食を母と向き合ひ霞草

杖をつく母に馴れたる雀の子

鴨引きし湖に夕波走りけり

肘つくと心が折るるサイネリア

靴箱の上に明日蒔く種袋

手の皺に紛るる花の種を蒔く

まだ隅に種のはり付く種袋

遠出せぬ母に燕の来りけり

春の猫三面鏡に貌入るる

雨戸繰り立夏の空と思ひけり

浮人形この世恋しと浮いて来し

福岡 高倉 和子

東京 中田 みなみ

降るやうな光の中の踏み絵かな

一寸の百合芽確かめ薬飲む

鷹鳩と化し境内に集ひけり

春寒のはじめて付けし手摺りかな

何もせぬ疲れに似たる春愁ひ

合格子音がたのしとキャベツ切る

笛を吹く睫毛の震へ風光る

人力車に花の散り敷く寄りどころ

息殺す闇のありたる猫の恋

灌仏の杓に順番犬坐り

使はずに古ぶ大鍋さくら時

助六の碑へ桜餅持ち直す

石段に重なる影や仏生会

はこべらやあの日逃げたる籠の鳥

夜桜の水に映りて白さ増す

鍵穴と合はぬ鍵出す春一番

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

洗濯物たためばぬくし竹の秋

啓蟄の蟻ポストへの道いそぐ

轟るやクルーズ船より六千人

寺主催バレエ教室燕来る

安息日祭壇に咲く酔芙蓉

龍天に昇りし池か風渡る

衣更へ終始を猫に見られぬて

衰へし予知あたたためむ雁供養

多人種のごスペルミサや風の麦

吉良邸へマップ検索春の宵

ラッパが怒りぶつける新樹の夜

花明りして窓際の鴨せいろ

広縁に帯解きをりぬ半夏生

出自ほか定かならざる御開帳

遠き子を思ふばかりや瑠璃鳴きて

陽炎や洗ひざらひといふ決意

福岡 柴田志津子

石に置く刈込み鉄鳥の恋

初ざくら仰ぎよろめく齡かな

幾たびも眼鏡を拭ふ新社員

お茶漬ですます昼餉や藤の花

伝説はおほかた怖し朧月

巣ごもりの鴉が青年を威す

大岩に瀬鳴り高まる夏はじめ

転人生迎ふる拍手樟若葉

福岡 岸 洋子

羽織着て軍鶏両脇に鶏合せ

頭を狙ひ羽搏ち蹴り上げ軍鶏蹴合ふ

うづくまる軍鶏に声とぶ暮の春

水入りにさつと勝鶏抱き上ぐる

鶏合せ止めは嘴をとばされて

嘴こじ開け負鶏に水口移し

抱かれても勝鶏なほも蹴る構へ

負鶏をがつしと抱へ帰りけり

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

水背負ひ炎にかしづける野焼勢子

初蝶や並びて百のパイプ椅子

山焼の炎鳴りの囲む瘦畑

港には港の匂ひ初つばめ

山焼くやわらわらと出る雉・兎

咲き満ちて風やり過ぐす桜かな

夕雲を海へ見送る野焼あと

菜の花や岩に凭るる磨崖仏

山焼の夕べ灰降る麓村

花曇なにも残らぬ特攻基地

山火消え星々は鈴振るごとし

永き日や隙間だらけの野面積

春の雪藁をはさみし牛舎の戸

竹林の夕べさわだつ涅槃かな

茅起しの雨や牛舎に灯がひとつ

花冷や真暗がりの木の祠

北九州 秋 千 晴

留守の間の庭に子猫の産まれをり

鯉の尾の一打に歪む花筏

目刺しの場の女眉間に皺を寄せ

大鯰バケツに髭のつかへをり

金銀の鯉のからまる光琳忌

糸島 小林 朱 夏

白魚も我も二つの目のありて

種物屋今は煙草屋鳥雲に

一才で姉となる子が仔猫抱く

長老に愛されて亀鳴きにけり

子の遊ぶ露地が消えゆく金魚玉

福岡 永 淵 惠 子

鶴引きて入動き出す干拓田

私の口笛ほどの初音かな

春満月まだ濡れてゐる湯揉み板

花冷の寺の奥なる地獄絵図

シャンソンのやうな出逢ひも朧かな

太宰府 山 本 則 男

使はねば声の老いゆく養花天

春耕のほとり火入れの登り窯

情念のごとくに野火の走り出す

ずぶ濡れの燕に雫なかりけり

手のひらに卵の鼓動春きざす

福岡 あさなが捷

先客の猫に並びて日向ぼこ  
太閤水クレソン畑へ流れ込む  
仲良しに急に蜥蜴を出されたる  
胡蝶蘭あふるる楽屋眉をひく  
ひらがなの名前大きく捕虫網

岡垣 田中とし江

故郷としたき町なり芹の水  
明王に異国の相も霾ぐもり  
永き日や檜皮師の吹く竹の釘  
葺替の音の木霊や行者路  
倒木にしるき年輪土手青む

福岡 矢野百合子

卒業証書翼開くごとく受く  
春宵や敢へてひとりになりゆく  
花辛夷風の形に開きたる  
咲き満ちて放心したる櫻かな  
涅槃図のここに入れよと指差す子

千葉 原友子

一槌の火花の色も二月かな  
白梅の花の盛りのうす濁り  
誰かれに目高分ちて日の暮るる  
浮寝鳥ときどき脚で頬をかき  
ややこしき話は嫌ひチューリップ

長崎 松尾龍之介

引鴨のこゝろ急かるる河明り  
犬釘のいびつな頭あたたかし  
園内の春落葉載せエレベーター  
川に添ふ風の近道初つばめ  
涅槃図の象の哀しみ鼻掲げ

大阪 田町千章

雛飾る少しそつばを向けてやる  
走り根の老武者ぶりや光悦忌  
花冷の瑠璃の歪みも旧家なる  
眼光を臚へ甲冑具足かな  
気恥づかしき昼の花街柳の芽

北海道 押田裕見子

母のひく櫓に眠りし日の遠く  
子へ残すものは墓のみ山笑ふ  
人肌に触れては消ゆる牡丹雪  
恋の日を思ひ出すかに春吹雪  
うら若き僧へみやげの桜餅

大阪 井上和子

一山に響く早瀬や卒業期  
野あそびの土手転げをり滑りをり  
木の白の深き罅割れ揚ひばり  
さはささと瑞枝の揺れや鳥の恋  
鳥帰る屋根に大きな砂袋

太宰府 西住三恵子

鳥ごゑのゆさぶつてゐる糸桜  
背山より風おだやかに針供養  
仏壇の開けつばなしや雉の声  
母の辺の刻はゆるやか花月夜  
賞状に鼓鉦の花衣

兵庫 林 徹也

画数多き名札を胸に入園児  
旋盤の油の匂ふ菜種梅雨  
見送りて一駅歩く烏曇  
眼鏡とり視線をはづす踏絵の目  
嬰兒に雛持たせやる農婦の手

福岡 山内 碧

青空を傷つけぬやう霞みけり  
一片の雲のとどまる初桜  
蝶の昼何でも舐むる赤子這ふ  
枝折戸の縄の解れや花馬酔木  
背中にも眼のある教師目借時

糸田 宮井 知英

満開の桜を仰ぎ退院す  
春落葉今日する事を先送り  
桜蔭降る再入院の頼り無さ  
身辺は思ひ出ばかり豆の花  
ゆすらうめ母恋ふ詩の数多あり

福岡 角野良生

熊本 松田明子

平尾山荘 五句  
萱葺きの庵真つ白な春障子

天地に声解き放ち鶴帰る

望東尼の井いまもゆたかに春の水

折りあげし雛を流れに添はせけり

鳥帰るまなざし遠き望東尼像

郷土雛一対おはす暗き土間

白椿祠に彫む志士の歌

長持の布団も見せて雛道具

花茨望東尼にありし流刑の日々

遅れ来しものに空けおく涅槃絵図

直方 曾根富久恵

須恵苑 実耶

母の目の高さに雛の絵を貼りぬ

御開帳十歩歩めば顔見知り

桃の日や菓子の形は七福神

春祭たちまち鳥になりし飴

一夜経し雛の調度の向き修す

帰りには膝の笑へり御開帳

窓からは病棟ばかり春寒し

豆の花母を日なたに連れ出せり

掌をはみだす赤き落椿

缶蹴りの露地を知らぬ子春の風

実耶 青木 朋子

春満月部屋の舟の絵傾ぎけり

先生も遊ぶ約束春休み

春の空映す水面に魚の口

果て見えぬ桜並木の果てめざす

乳母車枝垂桜の中へ入る

須恵 田代 貞香

逆上りくるりと春の雲を蹴る

フランスに行きたしリラの香るとき

夕映の桜が重くなりけり

春昼の頭預くる美容室

恋猫の逢瀬は錆びしトタン屋根

兵庫 岩井 京子

少年の捕球胸すく花一分

少女ひとり野球チームに投げ四月

老犬と昨日見付けしすみれまで

雨の中春の草食む犬を待つ

何となくのどけし亀の泳げるは

福岡 山田 正子

山椒の芽ぱんと叩いて京なまり

暮るるまで一人ひとりが耕せり

かの桜夢の中までふぶきけり

初蝶の来て木洩れ日を揺らしけり

花吹雪浴びて淋しくなりにけり